

連載 第28回 福聚山史

池浦 泰憲 文
及川 一晋 編

大正から昭和にかけて

10、戦火をくぐり抜けた境内遺跡

昭和十六年十二月八日に開戦された太平洋戦争。徐々に戦火が日本本土へと迫り、ついに昭和二十年(一九四五)五月二十四日、三日間にわたるアメリカ軍B29四百七十機による大規模空襲により、東京山の手の各区のほとんどが焼け出された。常円寺の所在する淀橋区も廃墟となり、堂宇は灰燼に帰した。(『福聚山史』第一回)

昨年十月八日、常円寺祖師堂で開催された『日蓮聖人展』において、戦前・戦後に常円寺が発行した写真絵はがきが展示され、多くの方に興味深く観覧していただいた。

それらの絵はがきは、昭和六年(一九三二)に新築された当時と、昭和二十八年(一九五三)四月の諸堂落成記念当時の常円寺の様子を撮影したものである。この写真からそれぞれの時期の本堂や境内の様子を知ることができる。

そこに写る「東都一」と喧伝された常円寺の堂宇は、昭和六年、第三十三代及川眞能上人の代に、日蓮聖人第六五〇遠忌を期して新築された。

檀家の山形秀子氏によれば「空襲で焼ける前の本堂の柱は、両手で抱えきれないほど大きかった」といふ。残念ながら新築された本堂の様子をつかがう史料は、こうした記憶以外今

のところ見あたらない。したがって、これらの写真は、昭和二十年の空襲により焼失した戦前の常円寺の境内の姿を知る貴重な史料である。

そのはがきの内の一枚「常円寺前景」と題された写真を見てみよう。瓦屋根の本堂と客殿の姿が確認できるが、それと共に両建物間に灯籠と平石がみえる。現在の境内を見回すとすべわかるように、この灯籠と平石は、今と全く同じ位置に残っているのである。

日蓮仏教研究所の都守基一主任が、絵はがきの展示に際し、灯籠と平石の調査を行った。その結果、両者に刻まれた左記の刻銘を発見した。

祝 常円寺本堂
改築並及川眞能
師 喜寿納之

昭和五年十月十日
東京芝二本榎

鈴木源次郎

この刻銘から、両者が常円寺本堂の新築と、それとともに眞能上人の喜寿を祝して贈られたものであることがわかる。都守主任が述べられているように、昭和五年十月十日は満七十六歳の誕生日にあたる。

それでは、灯籠と平石を寄贈した鈴木源次郎とはどのような人物であろうか。常円寺のお隣の常泉院の檀家で建築家であるという(常泉院浅井憲龍住職談)が、この芝二本榎の鈴木源次郎は、帝釈天で有名な柴又題経寺の大客

殿の建築に関わっている。この大客殿は、昭和四年、「芝の二本榎の名匠」といわれた源次郎が材料を厳選して造営したとされ、総檜の大正の面影を感じられる建築様式で、現在は東京都の選定歴史的建造物になっている。このほか、同寺の帝釈堂の内陣外側の桐羽目彫刻の完成に、源次郎が丹誠

協力をし、大正末期から十数年をかけ昭和九年に完成したといわれる。また、港区高輪にある長泉山妙福寺の昭和九年に建立された現在の本堂須弥壇の彫刻は、源次郎が手がけたものであるという。

このほか上野の摩利支天、そして自らの菩提寺である常泉院の本堂も建築している。現在、常泉院檀家総代でアサイ建設社長の浅井氏は、晩年の源次郎に会ったことがあるそうで、源次郎は彫刻や大工職人を差配する建築作業の全体を取り仕切る立場の人で、特に建築材料の木材の目利きであったという。

鈴木源次郎については、まだまだ不明な点が多いが、常円寺に残る灯籠・平石に刻まれた「鈴木源次郎はこの人物であろう。常円寺のお隣の常泉院の檀家であり、同じ時期に

多くの日蓮宗寺院の建築を手がけ、活躍していた鈴木源次郎が、常円寺新築に関わっていたのである。
戦災をくぐり抜け今も境内に残る灯籠と平石は、さまざまな人々の縁の中で常円寺の歴史が刻まれてきたことを物語っている。



昭和6年の常円寺前景。矢印は現在も残る灯籠と平石。